

東日本における群集墳の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 初重, 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14454

2. 重点共同研究経過報告

東日本における群集墳の研究

大塚 初重 小林 三郎

A study of Collective Tombs in Eastern part
of Japan

Hatsushige OHTSUKA Saburo KOBAYASHI

本課題による研究は、1990年度から開始した。研究対象として山形県東置賜郡川西町に所在する下小松古墳群を選定し、明治大学と川西町教育委員会との共同調査という形をとって発掘調査を実施している。調査は、下小松古墳群第98号墳を具体的な対象とした。

第1次調査(1990年度)は同墳の墳丘規模確認調査を実施し、第2次調査(1991年度)は内部主体の発掘調査を実施して、各々すでにその概要を報告している※。

本稿では、その第3次調査(1992年度)について、その概要を報告する。

※ 明治大学人文科学研究所年報,第32号 1990年度,
同第33号 1991年度所収

下小松第98号墳(第3次調査概要)

本年度調査では、当該古墳の墳丘南側の築造状態の復原とくびれ部にみられる島状地ぶくれ部の性格の確認、昨年確認された小溝(以下周溝とする)の古墳全体でのプラン・規模を確認する調査を実施した。

前方部南側と前端部に1, 6, 7, 8トレンチを、くびれ部に2, 3, 4, 5トレンチを設定して、さらに91年度調査時のDトレンチも再発掘して、前方部における周溝の位置を確認するとともに最終的な墳丘の規模の確認、くびれ部の島状地ぶくれ部の性格の確認を行った。その結果、周溝がくびれ部で想定ラインより若干南側で検出され、かつ5トレンチにおいて幅約1.2~1.6m、深さ約40cmで墳丘裾に沿って若干彎曲した形で途絶えていることが確認された。また、1, 7, 8トレンチでは周溝の外縁立ち上がりが見られず、地山の自然傾斜を利用したものと考えられる。従って、くびれ部の規模が従来よりも幅広の約6.0mであることが理解でき、当初推定した古墳の主軸ラインが、南へ約1.5m移動するものと思わ

れる。この結果、昨年度検出された主体部の位置も主軸ライン寄りとなり、後円部中心付近に設定されていたことが理解できた。

また、くびれ部の島状地ぶくれ部については、人為的な盛土ではなく、本来の地山の起伏の上に墳丘崩落土あるいは自然堆積土が堆積した結果と思われ、造り出しのような人工的施設と判断することはできなかった。

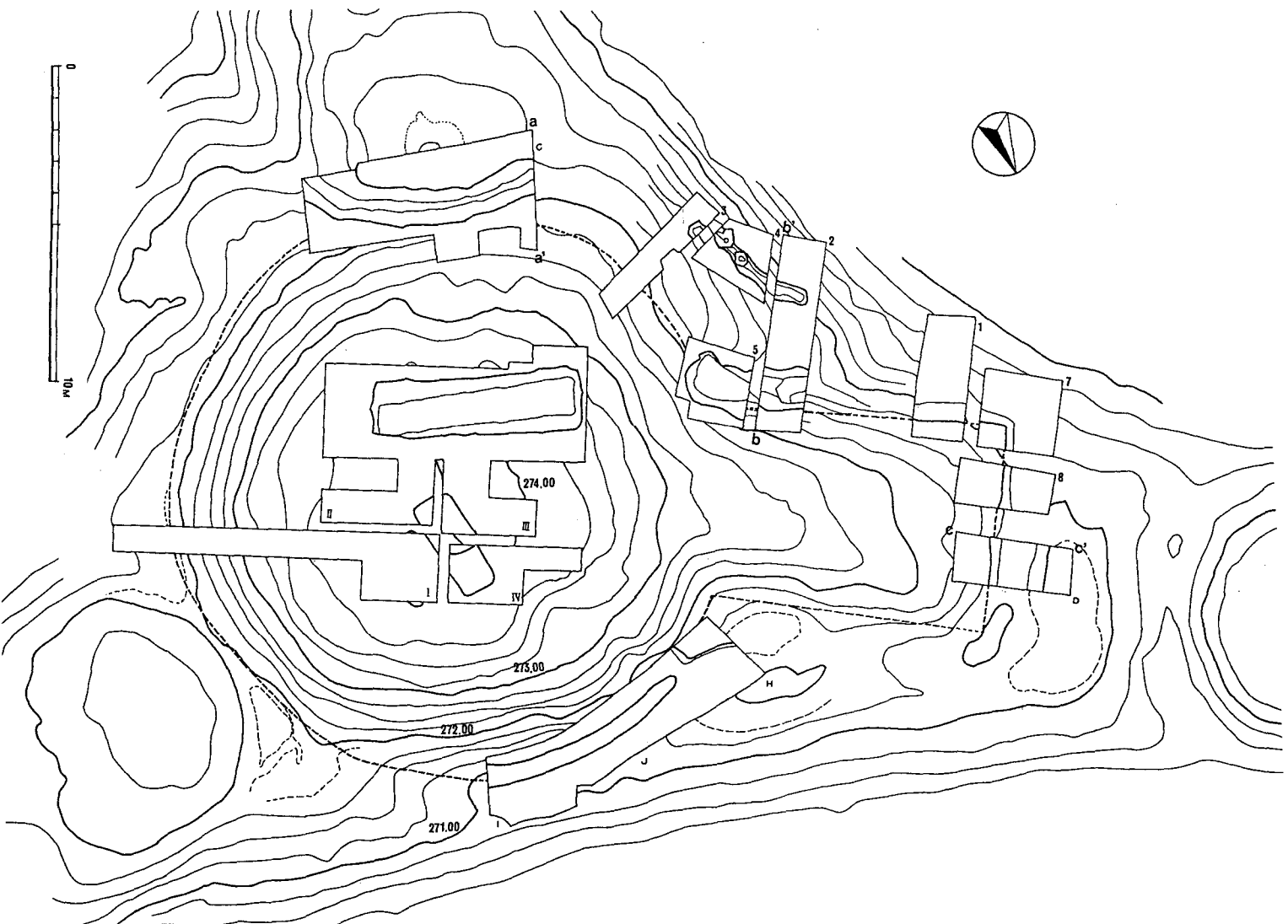
後円部南側では旧Cトレンチを東西に拡大し、周溝の形態・前方部との関係を調査したが、昨年検出したU字形状の周溝は、98号墳の後円部墳丘を約40cm削って変形させており、当調査区域内で97号墳側へ彎曲する平面形態を示し、後円部南側に近接する97号墳が築造された際に、97号墳の周溝が98号墳の後円部を削って築造されたものと判断した。前方部で確認した周溝の状態と併せて当該古墳の後円部南側には周溝を築造しなかったと考えられる。なお、当調査区域内の周溝の規模は、上幅約1.1m、下幅約0.3m、深さ約0.8mである。

また、2, 3, 4トレンチ南端では、小ピット2か所に切られる部分を伴う溝状遺構が検出された。小ピット(深さ20~80cm程度)は炭化物を多量に含むことから拔根の痕跡と思われるが、溝状遺構は島状地ぶくれ部の縁辺に沿って検出され、また溝状遺構を確認したトレンチのセクションを観察した結果でも古墳と同時期と考えられるが、その性格については不明である。

なお、今年度の調査において遺物の出土は認められていない。

ま と め

今年度の調査で、98号墳の平面プランが確認され、やくびれ部の幅が広く前端部がそれに対してあまり開かないという長方形に近い前方部を有する事が理解できた。また、98号墳に比較して小規模で後円部の南側に隣接する97号墳は、周溝築造時に98号墳の後円部を削り取る形で築造され、98号墳の周溝が後円部南側のみ築造されずに省略されて、一部不明瞭ながら前方部のみ築造しているという状況が確認された。これが98号墳に関してのみ見られる現象なのか、地域的な特徴なのかは現状では不明であるが、一般的に古い時期の形態を各所に示す古墳でありながら、時期的には新しいことから、こうした特異性は地域性を示すのではないかと理解している。しかし東北地方で2例目の藪が出土しており、時期的に



墳丘測量図及び各トレンチ配置図

前段階の61号墳で確認されたくびれ部祭祀跡が98号墳では確認できないことから、時期的なあるいは98号墳の被葬者の性格的な特異性が現れたものと思われる。

98号墳は同じ支群の61号墳より1～2段階新しい時期の古墳であり、下小松古墳群全体の継続期間からは後半期に属する遺跡である。両古墳は内容的には類似した鉄製品類が出土しているが、明確な祭祀遺構〔くびれ部壇状遺構等は性格不明〕を伴わない点が異なる。すなわち、両古墳の間には墓前祭祀に対する見方に変化が起きている可能性がある。そして、その規模・立地等を考慮すれば、98号墳被葬者が比較的有力な特性を有する可能性がないとはいえないと思われる。